

障害者就労場面における、福祉施設・企業・大学間の 連携作業の機能的分析

- 立命館大学学生ジョブコーチの実践から -

Functional analysis of cooperation between the welfare institution, the company and the university in the employment for persons with disabilities: Through Ritsumeikan Student Job Coach's Practices

中鹿直樹*・青山祥子*・伊藤亜里沙*・九野和也*・山口真理子*・吉岡昌子*・望月昭*・
木ノ戸昌之**・田谷隆行***

NAKASHIKA Naoki*, AOYAMA Syoko*, ITO Arisa*, KUNO Kazuya*, YAMAGUCHI Mariko*,
YOSHIOKA Masako*, MOCHIZUKI Akira*, KINOTO Masayuki** and TAYA Takayuki***

*立命館大学 **NPO 法人 障害者就労支援事業所 スウィング ***町家プランニング

*Ritsumeikan Univ., **A Non-profit Organization Support for Employment Corporation Swing,
***Machiya-Plannning

Key words: 援助・援護・教授, 障害者就労, 学生ジョブコーチ

1. 立命館大学学生ジョブコーチ

立命館大学では人間科学研究所の研究プロジェクトにおける研究、また対人援助学の大学院生・大学生に対する教育方法を検討する一つのフィールドとして学生ジョブコーチの実践を行っている。学生ジョブコーチは、本来は専門の職制であるジョブコーチの役割を、大学院生・大学生が、教員のスーパーヴィジョンのもとで、特別支援学校、福祉施設、企業と連携しながら行う実践である。一般のジョブコーチとの大きな違いは、援助・援護・教授の各活動の経過について定量的記録を行い、その記録をもとにした情報提供を関係セクターに提供し続けることにある。

2. 学生ジョブコーチの二つの軸

学生ジョブコーチの一つの軸は、応用行動分析学である。応用行動分析に基づく支援の具体的技術(課題分析、プロンプト、強化など)を適応することと、対象者の行動についての記録のみならず、支援者自身の行動・支援の在り方についても記録を行い、常に再帰的に支援の効果について考え、表現することが求められる。両者は一体のものであることを、実践を通じて学んでいく。

もう一つの軸が対人援助学実践の援助・援護・教授という機能連環である(図)。



3. 現在進行中の実践と参加セクター

現在、学生ジョブコーチは町家を利用した宿泊施設(企業、対象者の就労場)、福祉施設(対象者の所属先)と連携して就労支援を行っている。企業は、町家を活用することによる保全活動を目指し、地域貢献として清掃作業を障害者の就労の場に提供した。福祉施設は、働く場の拡充を図ることができる。もちろん清掃作業自体は水準以上の完成度が必要となる。そこで大学と連携することで支援の充実を期待することができる。大学は、現場で学生が対人援助実践を行うことができる、そして取り組みを通じて社会に対して、新しい就労支援の形を発信することが可能となる。

4. 援助・援護・教授の連環作業

山口ら(2010)の実践を通じて援助・援護・教授の連環について考える。まず振り返りシートや振り返りの機会の導入といった環境設定により、清掃作業の自立や完成を図った(援助)、この環境設定を企業と福祉施設に依頼して実現した(援護)、そしてその環境設定のもと、対象者に、自分の仕事を振り返ること、工夫を表現すること、清掃作業を十全に行うことの指導を行った(教授)。

この連環は三者の参加セクターが連携して初めて成立するものである。では連携を支える共通言語は何か? 学生ジョブコーチは、それを応用行動分析に基づく支援の記録であると考え、この記録は対象者の「できる」の表現である。「できる」とは、環境から独立した単独の能力を言うのではない。どのような環境設定=援助のもとで当該の行動が成立し得るのか、という情報が重要となる。先の例でいえば、振り返りシートや振り返りの機会という設定のもとで、作業ができ、工夫を表現できるといった情報である。

文献: 山口真理子・中鹿直樹・望月昭(2010) 第28回日本行動分析学会大会発表論文集